

全く腐敗し、之に加ふるに國初より國用給せず頻に聚斂を行ひ且つ交鈔を亂發せしより、諸民大に困苦し、皆亂を懷ふ順帝之を意とせず、淫樂を事として國政を顧みざりしより、叛亂四方に起りて元室益危し。

韓山童

流賊の蜂起 此時に當りて韓山童妖術を以て愚民を集め、宋の裔と詐り直隸の地に起る、軍敗れて執へられしも部將遁れて河南に入り、山童の子韓林兒を奉じて宋帝となす、之を紅巾賊といふ、諸方之に響應す、是に於て李二、張士誠は江蘇に叛旗を建て、郭子興は安徽を、徐壽輝は湖北湖南を畧し、方國珍は浙江に據りて天下騷

紅巾賊

然たり。

朱元璋

元の滅亡 郭子興の部將に朱元璋あり、衆望を得、子興に代りて其軍を率ひ、張士誠方國珍等を伐ちて江の南北一帯の地を畧し、遂に部下徐達、常遇春等をして北の方元を伐たしむ、徐達等まづ山東を畧し、河南を取り、潼關を陥れ大都に逼る。時に元また内亂あり、徐達の軍を拒ぐ能はず、順帝因て上都に奔り、元滅ぶ西紀一三六八年 世祖より是に至る十世九十八年なり、朱元璋金陵に入りて帝位に即く、之を明の大祖となす。



廣く人材  
を求む

### 第三節 元代の文化

學術 元は國初より廣く才學ある者を求めて任用し、敢て蒙古人なると否とを問はず。是を以て耶律楚材の如きは遼人なれども頗る重任せられ、また大功あり。其他ヘルシヤ人、猶太人にして官に任ぜらるゝ者多く、頗る學術に貢獻する所あり。世祖宋を滅するや大極書院を立て、趙復を舉用す。趙復始て程朱の學を唱へ許衡、吳澄の二大儒之に次ぎて起り、一世を風靡せり。

詩  
戲曲及小  
說

文藝 詩は宋に比すれば見るに足るものなし。唯金の遺臣元好問あるのみ、之に反して戲曲と小説とは此時

畫家

代に大成せり。抑、漢末に當り詩に樂府の一體ありしが、宋に至り變じて詞餘となり、元に及びて初めて戲曲となりしものにして、王實甫の西廂記、高則誠の琵琶記は尤優れたるものなり。小説は水滸傳、結搆規模の大なるを以て稱せらる。また畫家には陳仲仁、顏輝、張嗣成の徒あり。

喇嘛教

宗教 元代に尤も勢力ありし宗教は喇嘛教なり。もと佛教の一種にして、祈禱禁咒を主とす。唐の太宗の時始めて西藏に傳へ、其教僧代々西藏の王となる。元の世祖西域を征服するに及び、其民の慄慄にして治め難きを



八思巴

憂ひ之を利用せんとし、其教主八思巴を以て帝師とし、僧侶を統べ土藩を領せしむ。其後教主は常に西藏より迎へ立て儀仗帝王に擬し其命は詔勅と並び行ふ。之を以て僧侶も頗る威權を振へり。

基督教

基督教も亦此時代に勢力あり。此教は唐の代初て傳はり一時盛なりしが、武宗佛教と共に之を斥け、後久しく其跡を絶つ。然るに元の世に至り羅馬法王宣教師を支那及び韃靼に遣はして宣教を謀り、世祖の如きは頗る之を優待して寺院の建設を許せしかば、此より基督教も又東洋に勢力ある一宗教となれり。

## 第八章 明時代

### 第一節 明の初世

漠北征伐

太祖の外征 明の太祖既に即位せしも、元の順帝尙ほ漠北の應昌にあり。よりて常遇春、李文忠を遣し攻めて之を擒にす。然るに其太子愛猷識理達臘は和林に遁れて屢々來寇す。太子死して弟脱古思帖木兒立ち、元の宗室梁王把匝剌瓦爾密雲南に據りて之に應じ、また夏主明玉珍の子明昇四川の地によりて明に抗するを以て藍玉を雲南にやり、湯和を四川にやり、之を平定し、更に師を出して元主を征し、永樂年間に至りて初めて天下

雲南四川  
征伐

天下平定



平なるを得たり。

律令制定

太祖の内治 太祖は略ぼ中原を定めし後、意を内治に注ぎ、律令を制定し、元代の風俗を改めて悉く唐宋の古に復し、郡縣に令して學校を建てしめ、科擧法を再興す。兵制を改めて兵馬の權は總べて之を朝廷に握り、又宋元二代ともに郡縣制度を用ゐて孤立せし爲め滅亡を招きしに鑑み、封建の制を建て諸子を分封して外患に備ふ。

封建制

功臣を殺す

太祖は早く太子を失ひ、太孫猶ほ幼なるを以て、身後建國の功臣變を起さんことを恐れ、大獄を起し殆んど之

黃子澄

を殺し盡す、これ太祖の大失策にして其死後先に諸州に封ぜられし諸子跋扈するに及び、一人の能臣なきを以て遂に騷亂を生ぜり。

永樂の變 太祖死して太孫惠帝立ち、黃子澄の言を納れ漢の七國を削りし例に效ひ、諸藩王の地を削る。帝の叔父燕王棣テイ反旗を擧げて抵抗し、宦者の内應によりて京師の備なきを知り、直に京城に迫り、帝を城中に焚死せしめ、遂に自ら位に登る。西紀一四〇三年 成祖帝是なり。

安南の征

成祖の雄略 成祖四方を征討するの雄志あり、都を元の故都に移して北京となす。先づ安南の内亂に乗じ討



黎季犛

ちて之を滅し、更に元の遺族を征して大に之を破る。安南は元時代に於て賢主輩出し國平なりしが、元の滅ぶるに及び、王早く好を明に通ぜしも、暗愚にして國治まらず外敵の侵入を受く。後四代を経て頤立ち、外戚黎季犛のために弑せらる。頤の孫天平難を避けて明に投ず、成祖之を安南に納れんとせしに、黎季犛之を途に於て殺せしかば成祖張輔を遣はして之を討じ季犛を擒にして安南を平定し交趾布政司を置きて之を統轄す。元の遺族は脱古思帖木兒以來弑逆相次ぎ、坤帖木兒に至り、鬼力赤篡立して可汗となり國を韃靼と號す。其の

交趾布政司  
韃靼の征討

臣阿魯台之を殺し、別失八里より本雅失里を迎へ立つ。明招けども應ぜず、反て其使者を殺す。成祖怒り太孫をして京師を守らしめ自ら塞を出で、之を伐つ。本雅失里奔りて東の方幹難河に至る。帝追ひて再び之を破る。阿魯台もまた西に奔り、次で欵を通せしが、再び來寇せしかば、帝親征すること、二度に及び、歸路病を得て死す。

西紀一四二四年

之よりさき成祖の位に即くや、惠帝の海外に逃亡せるを疑ひ、宦者鄭和に大船六十艘水兵四万を附し、遍く南海諸國を探り、服せざる者は之を征せしむ。かくの如く

鄭和



南海諸國  
明に貢す

して明の威南海に加はり、琉求、暹羅、滿刺加、以下三十餘國皆明に來貢す。

辛禰

朝鮮國の建立 元以來高麗は國勢振ひしことなく、恭愍王の時に至り僧遍照に信任して政愈亂る。王死し其遺命を以て、遍照の子辛禰王位を嗣ぎ、明の冊封を請ふ。明太祖其正統ならざるを以て許さず。辛禰怒り明を侵さんとす。李成桂之を諫むれども聽かざるを以て、辛禰を廢じ、故王族を迎立せしも、柔弱にして民服せず。成桂威望あるを以て遂に擁立され位に登る。明の太祖、成桂の先に辛禰を諫めしを嘉みし、之を冊封し朝鮮國王と

李成桂

す。之れ朝鮮の太祖なり。西紀一三九二年 朝鮮是より明の外藩たり。

### 第二節 帖木兒大王の兼併

トグルク汗 元の末世に當り、其一族にして西北方に一時威を振ひし察合臺汗の國も四分五裂の有様なりしが、トグルクといふ者汗の位に上るに及び稍々勢を恢復し、大軍を起して中央亞細亞の叛者を征服す。時に蒙古の疎族に帖木兒と云ふ者あり、柯提附近の酋長なりしが、率先して其旗下に屬す。幾なくトグルクは本國

トグルク  
中央亞細亞  
を征す



帖木兒、中  
央亞細亞  
を占領す

の亂を聞き其子を中央亞細亞に留め帖木兒を之か參謀たらしめ、自ら軍を引て歸る。

帖木兒の大志 帖木兒はトグルクの子と議合はずして、花刺子模に遁れ、兵を起して之を伐つ。偶々トグルク死せしかば悉く中央亞細亞を占領し、都を撒馬兒罕に定む時に明の太祖の二年なり。西紀一三六九年 茲に於て大志を起し、成吉思汗の舊圖を襲ひ、世界を一統せんと欲し。中央亞細亞を平定せし餘威に乗じ、葱嶺を踰へて東に進み、察合臺汗の舊土を平げ、西に向ひて花刺子模を略し、更に進みて波斯に入り、旭烈兀の子孫の君臨せる伊

トクタミ  
シユ

兒汗國の領土を併吞す。

欽察を攻む 伊兒汗國の隣は拔都の子孫の君臨する所なりしが、此時偶、其の血統斷へ相續の争起り、トクタミシユと云ふ者帖木兒の援を請ひ位に上る。幾くもなく野心を起し、花刺子模を侵して領土を擴げんとす。帖木兒怒り伐て之を破り、逃るを追ひて阿羅思に入り、大にモスコウを掠奪す。コイリヂヤツクと云ふ者を立て、欽察汗とす。

帖木兒モ  
スコウを  
略す

印度に侵入す 印度は成吉思汗の西征以來、屢蒙古兵の來襲を蒙り、爲に衰微を招き、王家の興廢又常なかり



トグラッ  
ク王家

しがこの頃に至りトグラック王家の治世なりしも國運益傾き内亂各地に起りて之を鎮定すること能はず王家の威力全く地に墜ちたり帖木兒これに乗じて印度に侵入し印度河を渡りパンヂャプを過ぎてデルヒを陥れ大に掠奪を行ひ西紀一三九九年更に進みて恒河河邊に達せしが會オスマン國兵の其虚を襲はんとするの報あり急に軍を率ひて還る。

オスマン

オスマン國 突厥種族は隋唐の際中央亞細亞に彌蔓せしが元の起る頃小亞細亞地方に遁る元の成宗の頃オスマンと云ふ者其部長となり伊兒汗國の衰微に乗

バヂヤセ  
ツト

帖木兒明  
を襲はんとす  
帖木兒死  
す

じ小亞細亞を略してオスマン帝國を建つ是今の土耳其古にして後益盛大に趨きバヂヤセツトに及びて大に東羅馬帝國を破る又埃及のサルタンと計りて帖木兒を夾撃せんとす帖木兒印度より還りシリヤに入りて埃及兵を破りバヂヤセツトとアンゴラに戦ひて之を擒にし小亞細亞の地を平定す之よりさき帖木兒は東顧の憂なからん爲め明に好を通ぜしが今や四方悉く服せしを以て之を襲はんと欲し大兵を擁して東征の途に上る明の成祖之を聞き兵を發して甘肅の方面を警戒せしが帖木兒は途中訛打兒オトトルに於て病死せり西紀一四



年〇五

第三節 明の中世

瓦刺の入寇 明は成祖の後仁宗宣宗立ち英宗に至る。其間無事なりしが英宗の時に及び瓦刺の來寇あり。瓦刺はもと蒙古に屬せしが元の衰微に及び漸く勢を増し、外蒙古の西部及天山北路を占領す部長馬哈木の時漠北を一統し、明に入寇せんとせしが、成祖に破られて降る。其子脱歡部長となり、韃靼を破り、阿魯台を殺し、自可汗とならんと欲す。衆の服せざるを恐れ、元の後裔脱々不花を立て、權を專らにす。脱歡の子也先勇武にして

馬哈木

脱歡

也先

英宗 王振

于謙

哈密、河西、兀良哈の諸部を略し、遂に明の北邊を侵す。明の英宗宦者王振の言を納れ、親ら之を征せしが大敗して虜にせらる。西紀一四四九年也先進んで北京に逼りしが、于謙等英宗の弟景宗を擁立し、寇を拒ぎて大に之を破る。瓦刺和を請ひ英宗は國に歸るを得たり。是よりさき脱々不花は也先の專權を惡み、相惡しかりしが、也先は此度の敗を以て脱々不花の明に内通せるに由るとし、之を殺し自ら汗を稱す。次で其臣又之を殺し、衆を領せしが、韃靼の部長孛來來りて之を破り、脱々不花の子を立て、汗とす。是より瓦刺衰ふ。

孛來

瓦刺衰ふ



成祖宦者の禁を弛む

王曹汪劉  
振吉祥直瑾

宦官の跋扈 明の太祖は歴代の弊を察し、宦者の政事に預かるを禁ず。建文帝もまた宦官を遇すること頗る冷なり。之を以て宦官之を含み永樂の變あるに及び、竊に燕王に内通せしかば、燕王立つに及び之を德とし、宦者の禁を弛む。茲に於て宦者漸く政權を左右す。英宗の時王振、曹吉祥あり、憲宗の時汪直ありて尤横恣を極む。憲宗の後孝宗を経て武宗に至り、劉瑾宦者として政を專にし、正士を斥け、大に朝政を紊せしかば、諸藩王之を誅するを名とし、兵を擧げ帝位を篡はんとせしものあり、幸に皆平ぐを得しも、國力之より疲弊して復振はず。

達延可汗

ト赤

俺答

韃靼明を侵す、曩に孛來瓦剌を伐ちて其汗を擁立せしことありしも、韃靼は勢尙盛大と云ふに至らざりしが、達延可汗となるに及び勇畧あり割據せる諸部を一統し、大元可汗と號し、明の衰微に乗じ南下して、寧夏を陷る。○西紀一五〇一年 其子ト赤繼ぎ弟二人と共に内外蒙古の地を領し、屢明に寇す。ト赤の甥俺答は陰山附近に據り屢大同附近を畧し、遂に大擧して山西に入寇し、奪掠すること一月餘、男女二十万を殺し、牛馬二百万を奪ひ去る。西紀一五三二年 次で青海を略せしが、其地に流行する喇嘛教に感化され、殺戮を厭ひて復邊に寇するの意なし。



是に於て明と好を通じ河西に馬と茶の市を開く。西紀一五七〇 是より明の北邊寧きを得たり。

緬甸 緬甸は明將王驥の征伐以來明に服従せしが、明の世宗の頃雲南の蠻部の長孟養之を侵し、國都を陥れ、遂に衆に擁せられて酋長となる。孟養武畧あり、葡萄牙人の印度に來る者を備ひて旗下の兵とし、頻に四方を攻め雲南諸蠻部を降し、暹羅を併せ、遂に雲南の蠻兵を率ゐて明を侵す。糧食竭きて還りしが、其子に及び復大舉して雲南に入寇し、明將劉綎の逆撃を受け大敗して還る。西紀一五八三年 之より緬甸の勢復振はず。

孟養

劉綎

倭寇 我國南北朝の亂ありてより政令の地方に行はれざるに乗じ、西海の民海を越へて朝鮮支那の沿岸の地を侵掠す、之を倭寇と云ふ。元亡ぶるに及び其餘黨之と結び、海上に横行し、勢益熾なりしかば、明の太祖は使を我國に遣はして之を禁せんことを請ひしも、其効なし、世宗の時に至り、全力を盡して之を撃破せしより、其患僅かに止みしも、尙彼等は臺灣を據有して時に近海に出沒せり。

朝鮮の役 我國足利氏の政權を取るに及び、明に好を通じ、倭寇一時止みしが、其末年に至り再び沿岸に出沒



豊臣氏

して日明の交通全く絶ゆ、豊臣氏起るに及び國威を海外に輝さんと欲し、朝鮮の來貢を促し且つ明を征する嚮導を命ず。之よりさき朝鮮は明の外藩となり、尤も親密の關係ありければ、時の國王李昭（昭）は我國の要求を聞きて大に驚き急を明に報ず。既にして我軍朝鮮に入り諸道を陥るに及び、明主神宗は兵を出して朝鮮を援けしも、前後大敗せしかば大に懼れて沈惟敬を我國に遣はし和を請ふ。西紀一五九六年然るに媾和の條件の一致せざりしより、我軍再び朝鮮に入りしが幾もなく秀吉薨じ、朝鮮と明は危殆を免かるゝを得たり。

李昭

沈惟敬

#### 第四節 明の末世

明の大祖  
言路を開く

明黨の争 明は太祖の時務めて言路を開きしかば、爾後官人と野人とを問はず上書して國事を論ずる者多し。神宗の時顧憲成、鄒元標の徒事によりて帝を諫めしかば、官を罷められ郷に歸りて東林書院に同志を會し、講書に託して國政を論じ人物を可否し、天下志を得ざるもの多く之に和附す。當路の執政等大に之を排撃す。是に於て東林黨非東林黨の二派を生じ、互に政權を争ふ。神宗死し光宗熹宗相次ぎて立ち、葉向高相となり東林黨の者を任用せしが、宦者魏忠賢熹宗の信任を得る

顧憲成

東林黨

魏忠賢



に及び、非東林黨之と結托して悉く東林黨を逐ふ。是より魏忠賢の勢愈盛にして内外の權を掌握し、政大に亂る。

流賊の蜂起 明は世宗以來外患絶へずして國用足らざるを以て、神宗は宦者を派し鑛山を開きしが、奸吏之に乗じ民財を貪り、又尋で鹽茶船舶の税を増せしかば人民大に苦しむ、加ふるに連年天下穀物の稔らざるあり、民殆んど生色なし。此時に乗じ李自成、張獻忠の徒起て叛旗を擧げ、四方の流賊之に響應し、勢頗る猖獗にして、諸地を攻略し、遂に進みて北京に入る。明主毅宗自殺

鑛山を開き諸税を増す

李自成 張獻忠

し李自成自ら皇帝と號す。西紀一六四四年

滿州の興起 是よりさき今の滿州の地に愛親覺羅氏起り、勢甚だ盛なり。愛親覺羅の先は金と同族にして世々俄朶里城に居る。奴兒哈赤の時に至りて近隣の諸部を一統し、國號を建て、滿州と號す、清の太祖之なり。西紀一六二

愛親覺羅

奴兒哈赤

一四

葉赫部恐れて援を明に請ふ。明楊鎬を使はし兵三十万を以て之を援く、朝鮮王亦來り會せしが太祖大に之を破り、進みて遼陽を取り、遂に都を今の奉天府に奠む。太祖死して子太宗嗣ぎ朝鮮を伐ちて之を降し、更に大軍

楊鎬

太宗朝鮮を伐つ



吳三桂

を以て漠南蒙古を平定す。此に於て國號を改めて清と號し。西紀一六三六年連年明の北邊に寇す。明吳三桂をして大軍を率ゐて之を禦がしむ。

多爾兗

明の滅亡 時に清の太宗既に死し、子世祖位に在り、族人多爾兗を遣はし、之れに當らしむ。會流賊李自成の燕京に迫れりとの報至り、吳三桂は兵を旋らして救に赴きしが、途にて京城既に陥り帝亦逝くと聞き清に降り、其應援により李自成を討じ、大に之を破る。世祖後ち都を北京に遷し皇帝の位に即き、剃髮の令を下す。明は毅宗の兄福王由松南京に據り、史可法之を輔け、北征す、清

清世祖北京に入る

剃髮の令

福王

史可法

唐王

桂王

魯王

鄭成功

書を贈りて降を勸むれども聞かず。清軍遂に迫りて南京を陥れ、福王を蕪湖に虜にす。時に明の王族猶多く存して、諸方に據る。其中唐王福建に帝位に即きしが、幾もなく虜にせられ、明の遺臣は更に神宗の孫桂王を廣西に擁立す。清軍また來り侵す。王逃れて雲南に入る。此よりさき明の王族魯王は浙江によりて敵を禦ぎしが、破れて厦門に至り、鄭成功に依れり。成功の父は海賊鄭芝龍にして、母は我國平戸の人なり。慷慨大志あり、明室の恢復を以て自任し、頻に沿海を攻略し、魯王の來投するに及び、軍氣の振ふに乗じ、伐ちて南京を下せしが、後破



れて臺灣に退く。幾もなく魯王成功皆死し、桂王もまた吳三桂の軍に捕へられて死し。西紀一六明全く亡ぶ。成功死せしも其子孫猶臺灣に據り明の正朔を奉じて獨立の政を爲し、屢、福建廣東の沿岸を攻略せしが、清世祖の子聖祖の二十二年に至り遂に清に降れり。

### 第五節 明代の文化

學術 明の太祖及成祖共に學術を獎勵し、諸方に學校を建て、宋學を崇び科擧一に程朱の註による。是を以て程朱の流を汲むの徒輩出す。英宗の時の薛瑄其巨擘た

薛瑄

王守仁

學術二派に分かる

宋方孝孺

古文辭

歸震川

り。王守仁出るに及び陸象山の説に基き、別に一生面を開き、頗る達見あり。茲に於て學術二派に分かれ河東派は薛宣を宗とし、姚江派は王守仁を宗とし、各門戸を立て、相争ふ。

文藝 明の初、文には宋濂、方孝孺、詩には劉基、高青邱、名あり。後孝宗、世宗の間に至り、李東陽、李夢陽等古文辭を唱へ、李攀龍、王世貞等後に出で、之に和し、一時を風靡し、其餘勢我朝の文學者に及ぶ。明末に及び歸震川等出で、之を排し、文壇再び變ぜり。戯曲小説は元の後を承けて益、發達し、西遊記、金瓶梅等の名作あり



西學の智識

本草學

科學 傳教の爲めに渡來せる西人、支那文を以て天文地理の書を著す者多かりしかば、明代には西學の智識漸く支那人の間に傳はれり。又本草學は此時大に發達す。李時珍の本草綱目は三十餘年講究の結果に出でし大著述なり。

紅教

喇嘛教は明の中世に至り黃教の一新派を生じ此より舊教を紅教といふ。黃教は妻帯を禁じ、教主化身轉生して教を傳ふる者とせり。

基督教

基督教も亦明代には益盛となり、西僧陸續として來り、支那内地に傳道し、明帝の信任を得しものあり、後アラ

ンチエスコ派とドミンゴ派の間に宗教上の衝突を起せしが廣州に宗教會議を開きて和解せり。

### 第九章 清時代

#### 第一節 清の盛時

三藩の亂 清世祖の時、明の遺臣江南の地に出沒するを以て、明の降將吳三桂を雲南に、尚可喜を廣東に、耿繼茂を福建に封じて之を鎮壓せしむ。世祖死し聖祖立つに及び、明の遺孽既に滅び、三藩次第に強大なるを以て、帝之に備ふ、三藩も亦自ら安んぜず、吳三桂先づ反し、他

吳三桂  
尚可喜  
耿繼茂



江南清の  
敵地とな  
る

イバン三  
世欽察の滅  
亡

の二藩王の子相次で兵を擧ぐ。漢族の斷髮令を喜ばざ  
る者所在之に應じ江南全く清の敵地となり、臺灣の鄭  
經成功の子も亦招に應じ來りて沿岸を侵す。聖祖、岳樂、圖海  
等を遣り之を討ず。偶、耿繼茂の子鄭經と争を生じて來  
り降り、次で尙可喜の子も降る。幾もなく三桂死し、孫吳  
世璠嗣ぎ、雲南、貴州、湖南を固守せしも、次第に衰へ遂に  
滅ぶ。西紀一六八一年尋で聖祖は臺灣を伐ちて是を降せり。  
清露の關係　露西亞のモスカウ大公は、イヴァン一世以  
來欽察汗の信任を受けしが、イヴァン三世の時欽察汗ア  
ーメッド帖木兒に擁立されし子を討じ之を滅して、獨立

イヴァン四  
世  
コサック

彭春

す。其孫イヴァン四世に至り蒙古族の諸汗國を討滅し、更  
にドン河畔のコサックを率ひて西伯利亞を征す。イヴァ  
ン四世の孫ミケール三世立つに及び、益、コサックを派  
遣し、黒龍江に沿ひて滿州の北部に侵入す。清朝は南方  
の經畧に忙はしく之を顧る違なし。既にして三藩及び  
臺灣平らぐを以て、聖祖は彭春を遣はし水陸一万五千  
の兵を率ゐるコサック兵を雅克薩アルパツン黒龍江の上流に攻め、之  
を陥れしも、次で又コサック兵之を復せしかば、聖祖は  
荷蘭人により書を時の露帝彼得一世に送り、邊境を定  
めんことを請ふ。露帝之に應じ兩國の公使チルチンスク



チルチン  
の會  
議

黒龍江の支流に會し境界を議定す。清の公使強硬にして露公使をして數歩を譲らしめ、外興安嶺以南の地を清國に取れり。西紀一六八九年 聖祖は新に黒龍江岸に屯田兵を置き守備を嚴にせしかば、俄羅斯また南下する能はず。

韃靼の三部

噶爾丹征討 明の中世以後、韃靼の地は三部に別れ、科爾沁部は蒙古の東部にて成吉思汗の弟朮赤の後之に君臨し、科爾沁部の西北は喀爾喀部にして、其南は漠南蒙古部といひ、多くは成吉思汗の裔之に君臨す。三部の内科爾沁及漠南蒙古部は清に來降せしも、喀爾喀は未

喀爾喀  
噶爾丹

阿爾泰山  
東盡く清  
の有とな  
る

だ歸服せず、喀爾喀は三汗之を分領せしが互に争ふて善からず。此よりさき衛拉刺の準噶爾部長噶爾丹衛拉を一統し、三汗の不和に乗じて喀爾喀に侵入す。三汗敗走し、遂に清使に遇ひ清の保護を請ふ。清の聖祖噶爾丹に諭して兵を收め侵地を還さしむ。噶爾丹聞かず、益進みて内蒙古の東部に迫る。聖祖よりて親ら兵を率ゐる克倫河を溯り、逃るを追ひて昭莫多に至り、大に之を破る。之よりさき噶爾丹の策妄阿拉布坦は噶爾丹に怨あり、竊に清に通ず。噶爾丹遂に窘蹙して自殺す。是に於て阿爾泰山東盡く清の有となる。西紀一六九七年



達賴喇嘛

第巴

策妄阿拉  
布坦

西藏 元の世祖八思巴を帝師に拜せしより、其後嗣世々西藏の喇嘛を總管し紅衣帽を用ゐるを以て紅教喇嘛の稱あり。然るに其教弊害少からざるを以て、明の初世に黃教起り宿弊を一新し勢次第に昌にして、遂に西藏全部之に歸す。世々其主權者を達賴喇嘛といひ、宗教の事のみに関し、俗務は第巴と稱する喇嘛司る。桑結といふ者第巴となるに及び、五世達賴の近親なるを以て勢あり、頗る專横なりしが、拉藏といふ者之を殺し、達賴の廢立を行ふ。準噶爾部の策妄阿拉布坦此の紛擾に乗じ、西藏の都拉撒を襲ひ拉藏を殺す、西藏の喇嘛多く之

清威西藏  
に振ふ

に應ず。聖祖之を聞き兵を遣はして之を逐ひ、更に達賴を立て、悉く叛せる喇嘛を殺す。西紀一七二〇年清威此に於て西藏に振ふ。

噶爾丹策  
零

青海の征定 聖祖死し世宗立つに及び、青海の和碩部清威の西藏に逼きを嫉み、喇嘛を煽動して亂を起さしむ。世宗四川陝西の兵を發して之を擊破りしかば、逃れて北方準噶爾部に投ず。部長策妄阿拉布坦之を容れ、屢清に抗せしが、其子噶爾丹策零立つに及び、喀爾喀部に侵入し大敗して和を請ふ。世祖よりて阿爾泰山を以て兩部の堺とし、互に相越るを得ざらしむ。西紀一七三五年



阿睦爾撒納

班定

天山南北路の平定 世宗の子高宗立つに及び、噶爾丹策零の庶子達爾札、準噶爾に臨みしが、一族を殺戮して國大に亂れしかば、阿睦爾撒納之を廢して阿拉布坦の從孫を立て功を負ふて驕暴なり。遂に逐はれて清に來降し、伊犁の取るべきを言ふ。高宗乃ち班定を遣り阿睦爾撒納と共に準噶爾を伐ち、之を平定す。阿睦爾撒納功により準噶爾を領し、更に衛拉を總管せんことを望みしも、清之を許さず。阿睦爾撒納之を怨み兵を天山北路に擧げ、天山南路和卓、布羅尼特等之に應じ勢甚昌なり。高宗兆惠等の將を遣はし之を撃たしむ。阿睦爾撒納敗

雲南貴州

大小金川

白古部

死し布羅尼特は巴達克山に走り途に殺さる。是に於て天山南北兩路の地全く清の版圖に歸し、西紀二七浩罕、五七年阿富汗の諸國皆來りて好を通ず。清の西南經畧 清は西北方の征定に従事せると同時に絶へず西南の經畧にも意を用ゐたり。世宗の時雲南貴州の苗蠻亂を起し勢猖獗なりしが、將を遣はし悉く之を平ぐ。獨大小金川四川西部の蠻族等地の僻險を頼み反覆常なきを以て、高宗阿桂をして之を討たしめ、悉く之を征服す。西紀一七七六年 緬甸は元初に入貢せしも、其後内亂相次ぎ、白古部之に



暹籍牙

暹羅

山田長政

乘じ國都阿瓦を陥れ、伊羅瓦底河上流の諸蠻部一時皆之に羈屬せしが、獨り木疏の部長甕籍牙之に抗し、阿瓦を恢復し、新緬甸國を建て、暹羅を伐つ。暹羅も亦古より内亂絶へず、明末の頃我國の山田長政暹羅王の信任を得て政を輔け、一時太平を致せしが、幾もなく叛者の手に倒れ、後國威次第に振はず、緬甸王之に乗じ來り侵し、國都猶地亞を陥れ兵を留めて去り、更に轉じて雲南の西南部を侵す。清軍防戦して利あらず。高宗更に傅恒をして水陸並び進みて之を討ぜしむ。緬甸王敵し難きを知り和を請ふ。高宗も亦將士の瘡痍に罹るを恐れて之

を許るす。之よりさき漢人鄭昭緬甸と清の交戦に乗じ、安南真臘の援を得て暹羅國を再興せしが、次で内亂の中に斃れ、フアヤチャックリ新に王となり、好を清に通ず。高宗之を封じて暹羅國王とす。今の暹羅王家の祖なり。

安南は黎利さきに大越國を建てしより、子孫世々之王たりしが、此時に當り阮文岳といふもの弟の文惠と兵を擧げ、安南を一統す。黎氏の後裔黎維祜清に來奔して援を請ひしかば、高宗孫士毅を遣りて之を征せしも、反りて大敗せり。然れども文惠は後患を恐れて降を請

阮文岳  
阮文惠

黎維祜



廓爾喀部

福康安

ひ、高宗も亦前敗に懲りて之を許るせり。

印度の廓爾喀部は其東に在る泥波爾部を滅し、勢次第に強大となり、遂に西藏に侵入して掠奪す、高宗之を聞き、福康安をして之を討たしむ。福康安進みて其國都カ  
ーツマンドを陥れしかば、廓爾喀部は遂に降を請へり。

第二節 西人の東漸

西人の渡來 元時代に西人の東方に遠遊せし者歸りて盛に印度及我日本の富饒なるを報ぜしより、歐洲人の東方に意を注ぐ者多し。中にも葡萄牙、西班牙、荷蘭、英

葡萄牙

ヴァスコ  
ガマ

ゴア

平戸

吉利等の諸國は海に濱し、航海の術に長ぜしかば最早く渡來せり。

葡萄牙のジョン王は遠洋航海を奨励せしより、其國人ヴァスコガマ遂に亞非利加の南端を廻りて印度に達するの航路を發見し、此より葡萄牙人は陸續として印度に來り、印度西岸のゴアを取りて根據地となし、錫崙等に商館を建て尋で滿刺加、瓜哇を畧して、支那海に入り西紀一五後三年にして廣東に着し、寧波、廈門に商館を建て、更に阿瑪港を占領して、貿易地とし、同時に我肥前平戸にも商館を建つ、かくて葡萄牙人は十五世紀の半



西班牙人

以來百六十年間東洋貿易の全權を握れり。  
 西班牙人マゼラン西方に向ひて東洋に達する路を發見し、次で國王フィリップ葡萄牙を併してより、西班牙人の東洋貿易盛となれり。初め比律賓群島を占領し、馬尼刺を根據地とし、次で使を明に遣はし通商を求めし。も、葡萄牙商人に妨げられて意を達せず、馬尼刺に於て支那人と貿易し、又我平戸に商館を置けり。  
 荷蘭人は十六世紀の終に始めて東洋に來り、錫崙滿刺加蘇馬答刺に於ける西班牙の殖民地を奪ひ、葡萄牙及西班牙の商民を逐ひ、瓜哇バタビヤを根據地として、臺灣

荷蘭人

英吉利人

灣を占領し、盛に我國及支那と貿易を營めり。  
 英吉利人は西紀一五七九年始めて印度に航し、印度、暹羅、瓜哇に商館を開く。後三十四年我平戸に來り、貿易せしが荷蘭人に妨げられ、尋で支那の廣東廈門に至りし。も亦葡萄牙人に妨げられて意を達する能はず、唯印度に於てのみ勢次第に昌となり、遂に前二國の商人を壓倒せり。

莫臥兒帝國の盛衰 帖木兒の死後中央亞細亞は一時騷亂を生ぜしが、玄孫アフセイド起りて四方を征服し、東天山の西邊より西八吉打に至り、北シール河より南

アフセイ



バーベル

波斯灣に至る大版圖を開きしも、次で陣歿せしかば、領土再び分裂す。其孫バーベル阿富汗地方に起り、中央亞細亞を恢復し、更に印度の内亂に乗じて之に侵入し、當時の王家ローデ朝を倒し、印度の大半を領す。次で其子フマーイユン立つに及び、ベンガル王に逐はれて波斯に逃れしが、後再び印度を恢復す。西紀一五五五年 アクバル立つに及び、都をデルヒの西南アグラに奠め、人心を收攬し、遂に阿富汗人の回教國を征服して莫臥兒帝國を建て、阿母河より賓都耶山に至る地を領す。後ち屢南征せしも、意を得ずして死し、曾孫アウラングゼブに至りて、初

フマーイユン

アクバル

アウラングゼブ

めて印度全土を征服す。されど此時より莫臥兒帝國は既に衰微に趨けり。アウラングゼブ回教を崇奉して、非回教徒に税を課し、又就官を禁じければ、南印度の印度教徒マラーター同盟を作りて大に抵抗す。アウラングゼブこれを征して勝たず、國次第に亂る。其後波斯にはナザルと云ふ者起りて新に波斯王となり、諸方を征服し、印度に侵入す。西紀一七三八年 ムハメッドシヤ防戦せしも利なくして遂に和を請ふ。かく内憂外患交起れるに當り、西人東漸の勢益熾んにして、頻に印度の地を侵畧す。

ナザル

ムハメッドシヤ



マドラス

英人の印度  
侵略の始

英佛人の競争 英人は荷蘭人に印度群島より逐はれて後は専ら印度の貿易に力を盡し、マドラスを根據地とし孟買とカルカッタに商館を開く。されど葡萄牙人の失敗に鑑みて土地を侵畧することは猶豫せしが、印度の騷亂相次ぐに及び、貿易に損害を受くる少からざるを以て、英國東印度會社は土地を占領して貿易の安全を圖ることに決せり。

佛の根據地

此よりさき佛蘭西は西紀一六〇四年印度會社を建設して東洋の貿易に従事せしが、其印度の根據地<sup>ポンヂ</sup>ポンヂ、シェリー、シヤンダルナガルはマドラス、カルカッタと相

クライヴ

ヘスチン

アーマド

去ること遠からざるを以て、常に競争を生じ、且つ歐洲にも當時英佛の戦争ありて、兩者互に反目せり。此時に當り莫臥兒帝國瓦解し、各地に副王獨立せしかば、英佛各加擔する所ありて對抗す。英人クライヴ來るに及び、盛に策畧を行ひ遂に恒河流域の實權をば殆んど英人の手に握り、ヘスチング其後を受けて益、其策を行ひ副王の權を殺ぎ、英國の權を増進せり。  
莫臥兒帝國の滅亡 波斯王ナザル曩に阿富汗斯坦を征服せしが、其死後波斯の紛亂に乗じ、阿富汗人アーマド獨立し北印度に侵入して、當時莫臥兒帝國の實權を



マラーター同盟の分裂

握れるマラーター同盟を破り、莫臥兒帝を擁し北印度に號令す。アーマードの死後マラーター同盟は南北兩家に分れ相攻争せしが、佛帝ナポレオン政略上より北家を助けしかば、英國の印度總督ウェズレー南家に黨して、北家を破り、遂にデルヒの莫臥兒帝を擁して四方に號令し、次で英人はマラーターを滅して南印度を合はす、既にして印度人宗教風俗を異にせる英人の羈絆を悦ばず、恢復を圖らんとして所在亂を起せしが、幾もなぐ鎮壓せられ、莫臥兒帝は亂に與せしとの嫌忌を受け、帝位を奪はれ、緬甸に放たる、かくて莫臥兒帝國は全

莫臥兒帝國の滅亡

印度女皇

ポドアー  
ブラー

緬英衝突

く滅亡す。アクバルの建國より三百二年なり。次で英國は印度會社の政權を收め、英國女皇ヴィクトリヤ印度女皇と號し、總督を派遣して之を治めしむ。緬甸の滅亡 緬甸は十八世紀の末ポドアーブラー王位にあり、暹羅の内亂に乗じ、西の方阿羅漢を降し、更に暹羅を侵せしが、大敗して地を奪はる。阿羅漢人此に乗じて、獨立を圖かりしも成らずして、西孟加拉に遁る。緬甸兵之を追ひ孟加拉に侵入せしかば、此に英人と事を生じ、交戦の末大敗し、阿羅漢等の諸地を割き、二百万磅の償金を出して和を請ふ。されど此より深く英國を怨



み、屢其商民を苦めしを以て、再び戦端を開き、英國遂に之を滅して屬國となせり。西紀一八八五年

吉利吉思族

露國の中亞侵略 露國は彼得一世以來南下の企を有せしが、伊犁の西北西爾河の東北一帶の地に住める吉利吉思族が衛拉部に逐はれて保護を請へるに乘じ、オムスク、ウラルスク等の諸城を築きて邊民の統御を始め、遂に布哈拉、基華、浩罕の三汗國の相攻争せるに乘じ、大に侵畧の歩を進め、土耳其給斯且を奪ひ、チエムケンドを畧し、布哈拉汗を破り、撒馬罕を陥れ、布哈拉を圍む。布哈拉汗は阿富汗或は英國に援を請ひしも成らず、遂に

布哈拉

基華

洪罕

波斯

アガマハ  
メツド

撒馬罕以下の地と五十万留の償金を露國に與へて、和を講じ露國の保護國となれり、露國は更に基華を討じ之を隸屬國となし、又洪罕を討滅す。

英露の衝突 波斯はナゲルの死後内亂相繼ぎしが、十八世紀の末に至り、土耳其族なるアガ、マハメッド起りて之を一統せり。然るに其屬地デオヂヤの反して露國に内附せるを討じてより、露國と葛藤を生じて、遂に交戦せしが、大に破れ地を割き償金を與へて、和を請ひ露國の同盟國となる。西紀一八二八年 英國は露國の勢力がく波斯に加はるを見て使を布哈拉、基華、洪罕の三汗國に遣



阿富汗

ドストム  
ハメツド

り同盟を圖りしも遂に成らず。

阿富汗國はアーマドの死後屢々王位繼承の争亂起りしが遂にドストムハメツドといふもの可不里カブリスに起り、阿富汗國を一統すアーマドの孫シヤ、シュヂヤ印度に逃れ、其國の保護を請ふ。是を以てドストムハメツド英國を怨めり。露國之に乗じドストムハメツドに好を通ず。英國の印度總督兵を出して、可不里を陥れ、シュヂヤを立て、阿富汗王となす。國人服せず、英人の歸路を絶ち大に之を破り、ドストムハメツドの位を復す。既にして露國は既に布哈拉等を下し頻に南下するを以て英國

シエル  
アリ  
ヤクブ

は之を防がんと欲し、遂にドストムハメツドの子シエル、アリと同盟す。然るにシエル、アリ其子ヤクブと争ふに及び、英國ヤクブを援け、れば兩國の交舊の如くならず、露國之に乗じて阿富汗と同盟す。シエル、アリよりて英國の使者と絶ち、印度總督の兵と戦ふに及び、敗れて露國の救を請ふも、露國は英國を憚りて應ぜざればシエル、アリは中央亞細亞に逃れ、ヤクブ王となり英國と和す。次で英人を虐殺せるを以て、廢せられ、從兄アフツラマン立てり。此時に當り露國は既にメルブを取り阿富汗の西北境に侵入しければ、英國は阿富汗を助けて異

アフツラ  
マン



議を唱へ、遂に英露兩國より委員を出し疆域の事を議す。議一致せずして、戦とならんとせしが、英國歩を譲りて事平げり。

第三節 清の近時

内亂蜂起 清は高宗の末頃より國勢漸く振はず、内亂蜂起せり。初め白蓮教匪劉之協といふもの明裔と稱し四川陝西を亂し、幾もなく誅に伏せしも、次で乾州の苗魁吳八月等反し、貴州湖南の諸苗之に應じ、勢甚だ盛なり。官軍之を鎮定するに極めて苛酷なりしかば、民心激

劉之協

吳八月

蔡牽  
朱潰

し、高宗に繼ぎて仁宗立つに及び、荊州四川の地兵を擧ぐ。清將額勒登保等百方力を盡して討伐に従事し、九年を経て漸く鎮定するを得たり。次で南山の守備兵、其將の苛酷なるを怨みて亂を起し、總兵の來諭によりて漸く平らぎ。又安南及び閩粵地方に海盜起り、蔡牽朱潰之が首領となり、商船を奪掠し、或は私税を課す。浙江提督李長庚其根據地定海を攻めしが、賊徒は更に轉じて臺灣に據り自ら鎮海王と稱す。長庚之を攻めて戰没せしが、牽も亦支ふる能はずして安南に逃れ、次で平らげり。回部の叛亂、曩に高宗の天山南路を蕩平せし時、布羅



張格爾

二四八

尼特の子孫多く浩罕に逃れき、張格爾は布羅尼特の子孫なり。竊に祖業を復せんとを圖る。會々南路の參贊大臣贊靜政を顧みずして、人心を失ふ。回教徒亦清廷の虐待を怨めるに乗じ、浩罕汗マダリの助を得、回教徒を率ゐて天山南路に侵入し、喀什噶爾、葉爾羌、英吉沙爾、和闐を占領す。楊遇春及び伊犁將軍長齡等清廷の命を受け三路より進みて之を討じ、張格爾を擒にす。浩罕は張格爾の兄玉素普を助け再び喀什噶爾、葉爾羌を陥る。清廷より喀什噶爾以下四處の關稅をマダリに與へ、張格爾の一族を禁錮することを命じて和せり。西紀一八三一年

玉素普

マダリ

林則徐

清、英の通商を禁ず

阿片戰爭 葡萄牙人に妨げられしより支那に於ける英人の貿易初は大に振はざりしが、後次第に勢を得、他の歐洲諸國を凌ぐに至れり。其主なる貿易品として輸入せる印度の阿片は甚だ民生に害あるより、清主は屢之を沒收して其輸入を防がんと欲せしも能はず。宣宗の立つに及び、林則徐兩廣の總督となり命によりて阿片輸入の禁止を圖り、廣東の外商に嚴令し其蓄ふる所の阿片を出さしめて、悉く之を焼き、且つ爾後阿片を賣買する者を死刑に處すべきを宣告す。然るに英商の尙密賣する者多きを以て遂に其通商を禁ず。是に於て英



琦善

ゴーン

耆英  
伊里布

人は軍艦を遣はして舟山島を占領し、廣東、廈門、寧波の諸港を封鎖し、同時に渤海に入らしめしかば、清廷は琦善を廣東にやり和を計らしめしも成らず。英將ゴーン廣東を占領し、連に諸地を陥れ、遂に南京に迫る。清廷再び和を請ひ耆英、伊里布を遣はし、英人と南京に會せしめ、償金二千萬兩及香港を英國に與へ、上海、寧波、福州、廈門、廣東の五港を開放することを約して和議調ふ。西紀一八四二年

長髮賊の亂 清は曩に種々の内亂あり、今また阿片戰爭によりて威勢大に衰ふるに乘じ、洪秀全と云ふもの

洪秀全

曾國藩  
李鴻章  
左宗棠

華爾特  
戈登

耶蘇の弟と號し、其徒と廣西に亂を起し、國を大平天國と號す。西紀一八四九年 官吏の暴虐に苦めるもの争ひて之に應ず、之を長髮賊の亂といふ。時に宣宗死し、子文宗立つ。賊之を機とし、湖南より進みて諸方を陥れ、遂に南京に入りて之に據る。清將之を拒ぎて屢敗れ、賊勢彌盛なり。文宗天下に詔して勤王の兵を募るに及び、曾國藩、李鴻章、左宗棠等之に應じて起ち、且つ巡撫胡林翼、賞罰嚴明にして將士の心を得たり。清軍やゝ振ひ、屢賊を破りしも、賊勢尙盛にして遂に上海に迫る。時に文宗死して穆宗位に在り。米人華爾特、英人戈登等を傭聘し、洋槍隊を



組織して、賊を征せしむ。會、賊徒の中に内訌を生じ、互に相殺す。清軍之に乗じ大舉して南京城を圍む。秀全自殺し十五年來の亂始めて鎮定せり。西紀一八六四年

アロー號事件 清の五港開放以來外國船の出入する者多きに從ひ罪ある者之に投じて逮捕を免る者あり。會賊徒十二人亦英人の船アロー號に投じて備役せらるあり。清の官吏之を捕ふ。西紀一八五六年 香港知事パークス其不法を兩廣總督に責めしも要領を得ず。會、清人の佛國の宣教師を殺すものあり。よりて翌年英佛同盟して廣東に攻入り、更に進みて天津に逼る。時に清には長

パークス

英佛同盟  
して廣東  
を攻む

天津假條  
約

恭親王

媾和

髮賊の亂起り、之に苦める際なりしかば、清廷は假に天津に於て假條約を結び、二國の兵を去らしむ。其の翌年批准交換の爲めに使節の白河口に入らんとするや之を砲撃せしかば、二國の兵復白河に逼り、連りに太沽、天津、北京を陥る。文宗熱河に逃れ、皇弟恭親王を遣はし二國に和を求めしむ。露國公使其間に幹旋し遂に英に千二百萬兩、佛に六百萬兩を與へ、耶蘇教公布の自由を許し、既開五港の外別に牛莊、登州、潮州、臺灣、瓊州、九江、漢口を開放して和成れり。西紀一八六〇年

清露の關係 モルチンスクの條約により露の東方侵



恰克圖條約

ムラウイ  
ヨフ

愛輝の條約

畧は暫く中斷せしが、其後清の北方と西伯利亞との交通頻繁に趣きしより、露は清に請ひて恰克圖條約を結び、恰克圖を兩國の互市場とし、且つ露人の北京に來り通商を營むことの許可を得たり、然れど露人は之を以て満足せず、常に東侵の機を伺ふ。ムラウイヨフ西伯利亞總督となるに及び、黑龍江を下りて、河口を占領し、新に疆界を定めんことを清廷に逼る。時に清廷長髮賊の亂に苦しむを以て止むを得ず、黑龍江將軍奕山を使はし、愛輝に於て條約を結び、黑龍江を兩國の界とし、松江、烏蘇里江東岸の通航を許す。西紀一八五九年 尋でアロー號

ウラダ  
ストツク

布羅特

左宗棠

事件媾和斡旋の報酬として、烏蘇里江東岸の地を得、ウラダナストツクを建つ。露國は又樺太島を我より得、西紀一八七五年 かくて北方亞細亞一帶の地盡く其の手に歸せり。

中央亞細亞に於ては、露國は既に布哈拉、基華、浩罕の三汗國を征服し、或は討滅し、更に進みて吉利吉思族の一部布羅特を取り、かくて其疆域伊犁と接するに至りしが、會回教徒の叛亂ありければ、之に乗じて遂に伊犁を占領す。西紀一八七〇年 清將左宗棠、天山南路を討ちて之を平定するに及び、清廷は露軍の伊犁を退去せんことを請



求す、されど議久しく決せずして將に戰に及ばんとせしが、遂に双方讓歩して伊犁條約を結び、伊犁河の支流コルゴス以東の地を清國に還へし、他を露領とし、且つ清國は露に九百萬留の償金を拂へり。西紀一八八一年後印度の形勢、曩に阮文岳の安南を一統するや、安南の一部廣南に王たりし福映は暹羅に奔り、尋いで國王フイヤチャックリの援を得て、廣南に還り、阮文惠と争ひしが、遂に佛國の援によりて、之を滅し、安南を一統して國號を越南といふ。西紀一八〇三年暹羅王フチャックリは安南の騷亂に乗じ眞臘を取

らんとす。眞臘王救を越南に求めければ、越南王は暹羅と連年交戦せしも常に敗れて、眞臘は遂に暹羅の朝貢國となれり。西紀一八四一年されど後に至り内亂相踵ぎ、暹羅に併吞さるゝ恐ありしかば、遂に佛國に請ひて其保護國となれり。越南と佛國の和戰、越南の曩に佛國の援を受くるや事成るの後地を割き與ふる事を約せしが、王は約を履まず、且つ佛國の宣教師を虐待せしかば、佛は遂に柴棍を侵畧す。王止むを得ず南部交趾支那の地と償金二千萬法を出して和を請へり。西紀一八六二年されど君臣深く佛



人を憎み屢之を殺害せしかば、佛國は王を責め商賈の保護と號し、恣に駐在兵を河内海防の諸府に置き、且つ紅河上流の鑛山の發掘を求む、王其横恣を怒り、長髮賊の將にして、當時遁れて安南の境に在りける劉永福に命じ佛兵を撃たしむ。佛軍應戰して南定、河南を陥れしが、再び劉永福に恢復せられ、更に轉じて國都順化府を陥る、越南王止むを得ず、東京地方を割與へ、且つ自國は佛國の保護國となり、其許可なくして他國と交通せざることを約して和を結べり。

清佛戦争　されど越南王はもと清廷の封册を受けし

劉永福

安南、佛の保護國となる

清國の異議

クールベ

を以て清國は此媾和に異議を唱ふ、合紅河上流の地に於て清佛兩國の兵衝突し、佛兵の死傷多かりし故、佛國は千二百萬法の償金を要求す、清國之を拒みしかば、和親破れて清佛の戰となり、清兵は東京地方を占領せんとし、佛の海軍は福建艦隊を破り澎湖島を占領し、臺灣の諸港を封鎖す。會、佛將クールベ疾みて死し、且つ佛國の新内閣遠征を厭しかば、償金の要求を止めて東京地方を占領し、且つ安南の主權を得て和を媾せり。西紀一八八五年

日、清、朝鮮の關係　初め我琉球の漁民臺灣に漂着して



臺灣事件

大久保利通

大院君

我軍艦を  
江華島に  
砲撃せし  
かば、黒田清隆を遣して之を詰り、遂に朝鮮の

屢其東岸の蠻族生蕃に殺さる。我國よりて清廷を責めしに生蕃は其治外なるを公言せしかば、兵を發して之を征服せり、然るに清國は臺灣を失はんことを恐れ、俄に異議を唱へしかば、大久保利通を天津に遣はし、討議の末償金五十萬兩を出さしめて撤兵せり。西紀一八七五年朝鮮は仁祖以來世々清の封冊を受けて今王李熙に至る、王の立つや幼なるを以て實父大院君政權を執る、我國は徳川幕初以來朝鮮と交通せしが、維新の後に及び朝鮮に開國を勧めしも應ぜざるのみならず、我軍艦を砲撃せしかば、黒田清隆を遣して之を詰り、遂に朝鮮の

朝鮮を獨立國と認む我國と朝鮮の通商條約

事大黨と獨立黨と

獨立國なるを認め、且つ釜山の外元山、仁川の二港を開き、我國と通商條約を結ばしむ。王既に長じ親ら政を執るに及び、政權王后閔氏の族に歸しければ、大院君心平ならず、亂民を煽動し閔氏の一族を殺し、且つ我公使館を焼かしむ。我國井上馨を遣はし其罪を責め償金五十萬圓を出さしめ、且つ京城に於ける我公使館に守護兵を置くとなす。清國亦我國との權衡を保たんが爲めに兵を派遣せり。是に於て朝鮮に二黨を生ぜり、一は日本に依りて、獨立の體面を保たんとする者にして、獨立黨といひ、他は尙ほ清を仰がんとする者にして、事大



黨といふ。兩黨軋轢の末獨立黨は事大黨を撃ち國王を擁して我公使の助を請ひ、公使之に應じて王宮に至りしに、清兵は事大黨を助けて獨立黨を破り我公使館を焼く、よりて我國は井上馨を朝鮮に遣し、償金十三萬圓を出さしめ、別に伊藤博文を清に遣はして、李鴻章と天津に會して條約を結び、兩國互に朝鮮の駐在兵を撤去し、爾後派遣の必要あらば先づ相通告することを約せしむ。我明治十八年西紀一八八五年

後九年を経て朝鮮に東學黨の亂起り、遂に日清間の交戦となる。東學黨は西教を排する團體なり、其勢漸く熾

天津條約

東學黨

清天津條約を破る

となり、政府之を鎮壓する能はず。よりて清國に援兵を請ふ。我國も亦兵を派して朝鮮在留の民を保護せしめ、且つ公使を遣はし清國と共に韓國の内政を改良せんことを議らしむ。然るに清公使之に應ぜざるのみならず、我兵を撤せんことを請求す、かく清の天津條約を破りしより、我國遂に宣戰を發布し、牙山平壤に於て清兵を破り、海陸并進みて旅順威海衛を陥れ、渤海灣を扼す、清國震駭して李鴻章を我國に遣はし和を請ふ。伊藤博文、陸奥宗光之と馬關に會し、談判の末清國は朝鮮の獨立を認め、償金二億兩を出し、遼東半島及臺灣澎湖島を

馬關條約



三國同盟

割き、沙市、重慶、蘇州、杭州、を開放するを約して和成れり。西紀一八然るに露西亞は東方に對する政略上我國の遼東半島を占領するを厭ひ、獨逸佛蘭西と共に我に勸告する所ありしかば、我國は代償三千萬兩を以て之を清國に還付せり。

第四節 清代の文化

考證學

考證學 明末以來學者漸く宋學の空疎なるを厭ひ、専ら古義の闡究に力を盡すの傾を生ぜり、此學風を名けて考證學と云ふ。黃宗義、顧炎武、阮元、閻若璩、毛奇齡、趙翼

朱子學及王學

等此學派の重なる人なり。清の諸帝は皆學問を獎勵せしより浩瀚なる著述編纂上下に多く出づ。佩文韻府、淵鑑類函、康熙字典、圖書集成、大清會典の如きは涉獵の宏博なる古來未だあらざる所なり、此等は皆考證學の事業に屬す。此間朱子學王學の流を汲むの徒亦少からずと雖も著るしき事蹟の見るべきものなし。

詩文

文藝 清の詩文は時に從ひて其風を變ぜしも要するに古に摸倣するに止まり、未だ別に新機軸を出せしものあらず。其中魏禧、朱彝尊、侯方域等は、文に於て、錢謙益、王士禛、吳偉業等は詩に於て名を得し者なり。



佛教  
喇嘛教  
回々教  
儒教  
耶蘇教  
内閣  
六部  
理藩院

宗教 佛教は清に至りて益衰微し、殆んど人を教化するに力をなした。喇嘛教は舊によりて西藏滿州蒙古に盛大なり。天山南路、甘肅の地方には回々教行はる。支那本部中流以上に行はるゝ者は儒教にして、其の勢力も亦少からず。耶蘇教も亦次第に盛となり、今や殆んど各省至らざる所なしと雖も、時に他教徒と衝突し往々災害を蒙れり。

官制 清の中央政府は、内閣に於て天下の政治を統べ、五大學士を以て之を組織し、其下に吏、戶、禮、兵、刑、工の六部ありて行政事務を分掌す。又理藩院ありて藩政を掌

總理衙門  
海軍衙門  
軍機處  
地方官制  
八旗

れり。六部及理藩院の長官を共に尙書といひ、次官を侍郎といふ。別に總理衙門ありて外交事務を掌り、海軍衙門ありて海軍を統ぶ。更に内閣の大學士各部の尙書及侍郎を以て軍機處を組織し、以て軍國の大事を參決せしむ。

地方の官制は、各省に總督を置きて文武の大權を統べ、其下に巡撫、提督あり、又布政司、按察使等ありて、地方の政務に當り、府に知府あり、州に知州、縣に知縣ありて、各管内を治む。

兵制 清の陸軍には、八旗、綠旗の制あり、八旗

八旗とは正黃、鑲黃、



綠旗

正白、鑲白、正紅、鑲紅、正藍、鑲藍をいふ、に滿洲八旗、蒙古八旗、漢軍八旗の別あり、每旗の長官を都統といふ、其京師にあるを禁旅八旗と稱し、地方にあるを駐防八旗と稱す。綠旗は明の滅亡後、専ら漢人を以て組織せる常備軍にして、各省に駐在せり。其他支那本部に勇兵あり、蒙古に旗兵あり、西藏に番兵あり。

海軍は四部の水師に分る、北洋、南洋、福建、廣東是なり。各提督ありて之を統ぶ。

四水師

中學東洋史 終

明治三十三年四月五日  
 明治三十二年十月十三日  
 明治三十三年四月五日

中學東洋史  
 定價金五拾錢

編纂者 文學士 荻野仲三郎

東京市神田區猿樂町二十三番地

發行者 來島正時

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目  
 十二番地

印刷者 島保藏

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目  
 十二番地

印刷所 株式會社 秀英舎第一工場



大 賣 捌 所

東京市日本橋區通三丁目

文魁堂 林 平次郎

京都市寺町通御池北入

松田 正助

大阪市南區心齋橋一丁目

文海堂 松村九兵衛

大阪市東區備後町四丁目

集成堂 石井鈞三郎



建國の歴史を  
研究するに  
必要なる資料  
を蒐集するに  
努力すべし  
此の爲め  
建國の歴史  
を研究するに  
必要なる資料  
を蒐集するに  
努力すべし  
此の爲め  
建國の歴史  
を研究するに  
必要なる資料  
を蒐集するに  
努力すべし  
此の爲め



85  
630











